

農耕にかかわる伝承文化について

かつて寺田寅彦は、「日本のような多彩にして変幻きわまりなき自然をもつ国で八百万の神々が生まれ崇拜され続けて来たのは当然のことであろう。山も川も木も一つ一つが神であり人でもあるのである。(中略) また一方地形の影響で住民の定住性土着性が決定された結果は至るところの集落に鎮守の社を建てさせた。これも日本の特色である。(中略) 地震や風水の災禍の頻繁でしかも全く予測し難い国土に住むものにとっては天然の無常は遠い遠い祖先からの遺伝的記憶となって五臓六腑にしみ渡っているからである。」^{*1}と述べています。

つまり、日本人の価値観の中には、自然に対しては、従順にならざるを得ないという発想がもととなって、「日本人はその季節感によって、(中略) 花咲いて張るを知り、は落ちて秋を覚ること、草木の生長、魚鳥の捕獲を体験しながら、折り目を判断するテクニク」^{*2}を生活の中に盛り込んできていると考えられます。

そして、そこには、自然からの恵みに対する農民の思いが端的に表されていると同時に日本人が持つ独特の自然に対する畏敬の念を、感じ取ることができます。

前述の雪形のような自然を活用した農事暦も、山に対する特別の思い(稲作農耕社会の観念や世界観、宇宙観)^{*3}といった「自然に逆らう代わりに自然を師として学び、自然自身の太古以来の経験をわが物として自然の環境に適応するように努める」^{*4}日本人の生き方を明確に示しているものといえます。

そこであらためて、地域に残る行事を見つめなおしてみると、農耕にかかわるものの多いことに気づかされます。

私たちの生活の節目としての行事の多くは、稲作とのかかわりの中で行われる「過去と未来と二つの側面に向かって、『今でないもの』を遠望する」^{*5}ハレの舞台であることが多いといえます。しかし、前述のごとく、それら文化が持つ意味(いわれなど)の伝承については、かなり厳しい状況にあるといえます。本来は、祭などの儀式の前後に大人が子どもたちに対して、祭りの持つ意義などを伝えていたものと思われませんが、社会の変化に伴ってその伝承機能が失われ、かろうじて形だけが残っているものが多いことがその一因とも考えられます。

そこで、本教材開発では、季節のごとに行われている稲作にかかわる行事を、デジタルコンテンツ「農業にかかわる祭りやならわし」として映像にまとめました。

稲作にかかわる行事の名称や内容は、地域によってのちがいはありますが、大筋では日本全国共通していることがらが多いと思います。

このデジタルコンテンツを、学習の導入時に活用することで、自分たちの地域の文化を追究する学習のきっかけ作りがスムーズに行われると思います。

*1 小宮豊隆編「『寺田寅彦随筆集』第五巻」 岩波書店 1963年

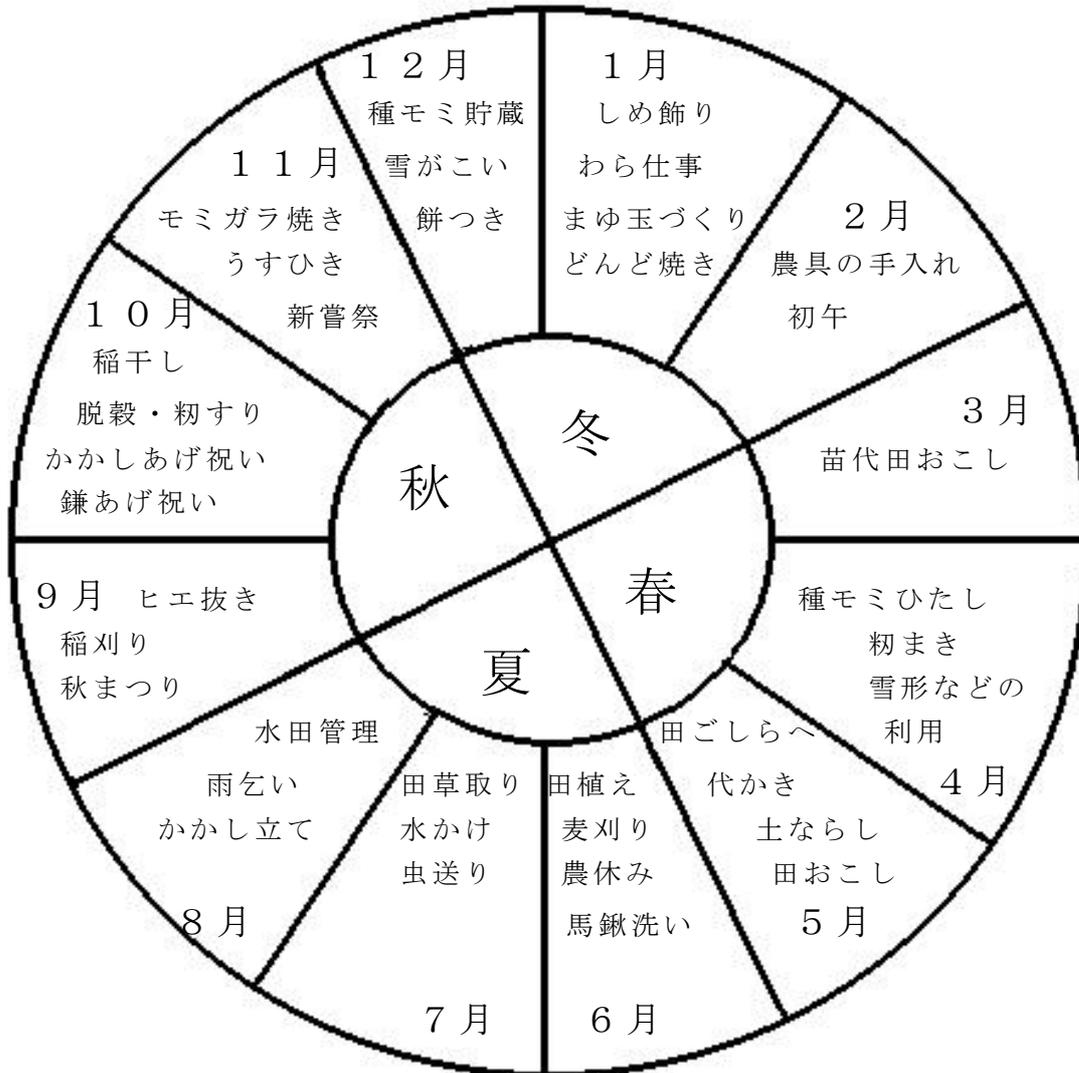
*2 「日本人の生活観」宮田 登 「日本民俗体系第九巻『暦と祭事』」小学館 1984年

*3 「日本のこころ、日本人のこころ」山折哲雄 日本放送出版協会 2004年

*4 前掲書*1

*5 「民間暦考」柳田国男『定本柳田国男集』第十三巻筑摩書房 1969年

[農事暦]



本研究では、農事暦に関連して、藁に視点を当てた授業実践を提案しました。

日常、何気なく接している藁に焦点を当てたこの授業実践では、子どもたちが1年間米作りにチャレンジしながら、年間を通して「藁」というものが、生活とどのように結びついているかを、あらためて問い直すきっかけとなりました。

さらに、江戸時代の人々の生活と藁との関係を追究した子どもたちは、現在話題になっている環境の問題としての「持続可能な社会」を形成していくには、どういった視点で自分たちが生活をしていかなければならないのかということについても、自然と考えるようになりました。

つまり、先人の知恵を伝承していくことが、現代社会がかかえている課題の解決の糸口になるということを、子どもたちは発見し、伝統を継承していくことの大切さを学んだといえます。

このように、藁と生活との関連についての学習も、子どもたちの学習意欲を高める学習になるので、教材研究の際には、農事暦とデジタルコンテンツとを関連付けて活用してください。

教材開発の視点

○伝統・文化等を扱った授業設計のポイント

伝統的な文化と、私たちの日常生活との関係を考えてとき、その文化の存在に気にせず生活していることが多いのではないのでしょうか。

小学校学習指導要領解説社会編（以下解説編）では、「地域の人々の生活と」「伝統や文化などとの関連，願いを実現していく地域の人々の工夫や努力，協力」について考える力を育てることとされています。

そのためには、日常生活の中で見落としがちな自分たちとの生活と社会的なものとの関連に気づかせ、その学びを通して自分たちが社会にどのようにかかわっていくかということ、子ども自らが考え、結果として行動（社会への参加）する力を育てる学習展開を教師自らが考えて実践しなければなりません。

解説編ではそのため、「古くから伝わる文化財や年中行事」やそれらの「内容やいわれ，地域の人々がそれらを大切に保存し継承するための取組など」を具体的に取り上げて、子どもたち自らが地域の文化について調査活動を行ったり、子どもたちの体験談を紹介しあったりする活動を通して、地域の人々の願いや保存・継承するための工夫や努力を考える学習活動が望まれています。

確かに、子どもたちと地域の行事との関係を調べてみると^{*6}、多くの子どもたちが秋まつりやどんど焼きといった地域の民俗芸能的な行事に参加していますが、そのいわれなどについてはほとんど理解しておらず、さらには、そのようないわれを教えてくれる人もほとんど身近にいない状況でした。

そこで、授業を設計するにあたっては、地域には今でも伝統的な文化は現象として残っているが、その内容についての伝承がきちん行われていない実態を踏まえて、何を・どのように教材開発し、授業実践に結びつけていくかということが重要な視点になってきます。

そのため、解説編にも示されている自分たちも地域の伝統や文化を受け継いでいく一人であるという意識を養うには、また、内容を知ったという段階から地域社会の一員として地域の行事などへの参加意欲を高めるには、どのような授業構成にしたらいのかということがポイントになります。

つまり、学習の第一段階では「地域を見つめなおす学習」、第二段階では「地域から学ぶ学習」、第三段階では「地域にかかわる学習」というように、子どもの発達段階も考慮しながら、段階的に学習を展開していくことが重要になります。そして、第一段階では、何を「きっかけ」にするか、第二段階では、「だれに」「どのように」学ぶのか、第三段階では、主体的にかかわるとはどういうことか、自分の気持ちをどのように表現させるかということ、学習過程全体を通して、地域調査の方法をきちんと学ばせることがポイントとなります。

^{*6}平成19年度文部科学省伝統・文化等教材開発事業報告書「地域に残る農耕に関わる文化伝承～農耕に関わる祭りからみる日本人の持つ自然への畏敬～」(信州大学)2008年

〇見えていないものを見えるようにする



たとえば、雪形を考えてみましょう。
写真は長野市近郊の田んぼから見える飯縄山です。

何気なく外観していれば、天気もよくいい景色程度で終わってしまいます。

しかし、この山の景観を雪形として農業に利用すれば、全くちがった意味を持ってきます。

どれが「雪形で」、その雪形がどのような意味を持っているのかということは、先人が生活経験の中で生み出したすぐれた知恵です。

飯縄山の種まき爺さんの雪形が、春の農作業の目安となるという「いわれ」を知れば、その後飯縄山を見る見方も変わり、次から山を見るときは、否応もなく「爺さんが見えているぞ」と意識するようになるでしょう。

それまで、見えていなかった情報が、見えるようになるということです。

こういった知恵は、口伝による伝承文化のため、受け継ぐ人や利用する人が途絶えると、その文化は消えてしまいます。

雪形でいえば、最近では精密な気象情報を利用したり、ビニールハウス等農業技術の進化ともなって、アナログ的な自然情報が疎まれるようになり、次第に語られなくなり、いつの間にか、「雪形」という文化的な情報が人々の生活から遠のいてしまっているのが実態です。伝統文化の学習では、このようなことがらを、どのように子どもたちを伝えていくかがポイントになります。

同じようなことがらは、日常生活の中にたくさん埋もれているので、学区の中を見渡せば、学習するに値する素材が、いたるところに存在しているといえます。

ここでの問題は、教師も子どもたちも、地域の人たちもそのことがら持つ意味の重大さに「気づいていない」ということなのです。

本研究のテーマである「地域に残る農耕に関わる文化伝承」をどう教材開発し、授業実践するかは、まさに、日々気づかないで通り過ぎていく地域の文化を、見えるように演出し、「無理やり」気づかせて、後世にその文化を継承する人材を育成することであるといえます。

その意味で、本研究における雪形の授業実践は、強制的に気づかせる学習の典型的な例でした。この学習した子どもたちは、全員が飯縄山登山の経験を持ち、日々見ている環境

でしたが、雪形については誰も知らないのが実態でした。

実践授業では、白馬の代掻き馬の雪形を題材にしましたが、後述の雪形にかかわる教材研究でも明らかのように、雪形は多くの地域で、農作業の目安にされてきたので、同様の実践が展開できると思います。

[第一段階：地域を見つめなおすレベルの学習]

「雪形」という事実に出会った子どもたちは、興味を示し他地域にも雪形はあるのかなと調べ、白馬など長野県内の他の山にもある事実を知り、今まで見えていなかったものを、見る力をつけたといえます。

[第二段階：地域から学ぶレベル学習]

農業生産にかかわって、実際に雪形を活用している人の話を聞くことにより、子どもたちの意識は一変しました。

農業の効率化に取り組み、会社方式で大規模な米作りを行っている農家のAさんは、機械化とともに最新のデジタル化された気象情報をフルに活用して、コメ作りに取り組んでいましたが、ある年米作りのはじめである「初まき」のタイミングに失敗し、大きな損失を出してしまったという事実子どもたちは直面しました。子どもたちの疑問は、最新の技術を使っているのに、なぜ失敗してしまったのだろうかということです。

Aさんによるとは、それ以降、最新の科学技術を駆使した気象情報も活用しているのが、その情報に付け加えて、昔から語り継がれている雪形などの自然を読み取る情報を年配の方から教わって活用するようになって、失敗が無くなったというのでした。

当然、最新の技術はいろいろな困難点をすべて克服してくれるものと考えていた子どもたちは、この学習で実は昔から語り継がれている伝承と組み合わせなければ、自然との対話である農業はうまくできないという事実新たな自然と人間との営みの関係や、伝承されている先人の知恵の素晴らしさを発見しました。

このことにより、子どもたちは、自分たちの地域にもそういった先人の知恵や伝承はないかと主体的に活動へと発展し、自分たちも「地域から学ぼう」という姿勢が子どもたちの中に育っていったといえます。

さらに、子どもたちは、最近では農業などの生産活動への利用もさることながら、その伝承文化そのものを特化させて、これまでとは異なった価値を持たせて、観光資源などとして地域の活性化に活用したり^{*7}、雪崩などの防災という視点^{*8}での活用という社会的な動きもあることに気づき、マイ雪形を見つけようという伝承とともに新たな文化のスタイルを生み出していくという活動へと発展しました。

*7「北東北のグランドデザイン～自立・飛躍する“アジアの北東北”を目指して～」北東北広域政策推進会議 2005年

*8「白山の雪形『猿のたばこ』」納口恭明（石川県自然保護センター「はくさん第32巻4号」）2005年ならびに「白山の雪形」小川弘司 他 石川県白山自然保護センター研究報告第34集 2007年



同様のことは、「風祭り」に見られる御幣の配置の学習でもみられました。

大人も含めて、何気なくその場を通り過ぎてしまえば、田の隅に立てられている御幣を子どもたちは見落としてしまいます。

しかし、御幣が立てられているところを線で結ぶと、昔からそこは「風の通り道」といわれているところで、稲が倒れないように気をつけているというシグナルとしての意味が持たされています。つまり、いわれを知らなければ、日常生活に生かすこともできません。

先人は、地形から発生する自然現象の特色を経験の中から見出して、どのように後世にその生活にかかわる経験を伝えていくかを考えたのでしょうか。この知恵を知った子どもたちは、自分たちの地域にも同じようないい伝えなどないか調べ出しました。

すると、「どどこ山の方角が暗くなってくると、雨がすぐに降る」といった経験法則に基づく天気予報のようなものが語り継がれていることを子どもたちは知り、自分たちの生活の中にも生かしていこうと試みるようになりました。

みずからかかわる学習へ

先に示した第三段階の「地域にかかわる学習」という視点では、「麻糸」や「義民」の学習が典型的な例といえます。



すでに地域では生産がおこなわれなくなってしまい、その文化を受け継ぐ人もわずかになってしまった「麻糸」づくりの学習では、他地域からの働きかけにより、再度地域の文化を見直そうという気運が高まる中、子どもたちは、自分たちが生活するふるさとの歴史を見直す活動を展開しました。絶えてしまった麻糸づくりの復活に、子どもたちは地域の人たちと一っしょに取り組み、自分たちでも麻糸作りを体験する中で、郷土の伝統を語りつ

ないでいこうという気持ちが育ったといえます。

義民の学習は、地域の活性化という視点も含めて、地域の人々から地域の歴史を語り継いでいこうと提案された活動を、子どもたちが受け止めて、地域調査をしながら史実を学んだ成果として、先人の思いを共感する学習へと高めていく展開になりました。

子どもたち自らが地域調査を行う「地域をみなおし・地域に学ぶ」という学習は、地域の伝統に関する知識を獲得するとともに、地域の人たちと直にかかわるという貴重な経験になりました。その結果、これまでは何気なくかかわったり地域の行事や景色は、意味をもったものに変わり（主体的に参加したり活用するという姿勢）、それら伝統を受け継いでいこうとする気持ちが育ったといえます。



地域を知るためのポイント

教材を開発する上で、教師がしなければならない基本的な作業に地域調査があります。勤務する学校が立脚する地域には、どのような歴史や伝統があるのかを、まずは教師自身が知ることが大前提になります。

指導計画立案の項目で、それぞれ場面に応じた教材開発の視点を示していますので、ここでは基本的なことがらについて示しておきます。

学校には、県史・郡史（誌）・市町村史・学校の歴史といった本があると思います。

また、地域によっては、社会の副読本なども作られています。

まずは、それらの資料を調べることから始めましょう。

調べる視点の基本としては、右の表の内容が考えられます。

資料で調べてもわからない、もっとくわしく知りたいという時には、地域の郷土史家や図書館の司書や博物館などの学芸員などに相談してみるとよいでしょう。

また、日常生活の中でも、学区内を歩くと、次の視点を常に持って歩くと、かなり

「見えていないもの」が「見えてくる」ようになります。

① 地域の環境条件

～地域の環境条件とどのようなかわりがあるか～

(1) 自然的条件

気候・地形・立地・環境・資源

(2) 社会的条件

人口・集落・交通・産業・観光

② 他地域との結びつき

他地域との結びつきがどのように影響しているか？

③ 人々の営み

その地域に住む人々はどのような工夫をしてくらしているか？

① どこにあるのか？

② どのようなものがあるのか？

③ なぜ、そこにあるのか？

次に、ちょっと意識することで、見え方が変わってくることもあります。

「鳥の目になろう」

私たちの日常生活は地上で、地域を低い視点から見ていることになります。しかし空を飛んでいる鳥の目から見たら、いったどんなふうに地域が見えるかという視点です。

「大きな煙突は？」「あの森は？」「あの建物は？」「山の中腹にあるものは？」といったように、いつもは気がつかなかったものが、見えてくる可能性があります。

「アリの目になろう」

学区内の道を、アリのようにコツコツと歩き回ってみましょう。学区の地図とデジカメを持って、「何だろう」（何の石碑かな？この神社は？）と思ったものを撮影し、場所を地図にチェックしましょう。そして、学校に帰ってから、チェックしたことを改めて調べなおしてみると、地域のことがくっきりと見えてくると思います。